

草の芽句会だより

NO,118
18,6、7

新緑の風に囲まれ裸婦の像
城に坐し新緑の風欲しいまま

貞

緑陰の見返り坂を仰ぎ佇つ
朝早く五羽の子燕巢立ちけり

禮子

あじさいの蕾小さき薄緑
搦手は一面白き姫女苑

範子

とりどりの菖蒲咲かせて老の庭
杖つきて門をくぐれば若葉風

節子

見返り坂園児一列梅雨晴間
小波の茂りを映し城の濠

貞子

城山のうちわ工房賑わえる
明易し目覚めて今日の予定など

剋子

鬱蒼と城の樹々たち梅雨に入る
大笹に青梅黄梅梅洗ふ

文子

蛇苺赤きが二つ今朝の庭
お天主の庭静もりぬ楡若葉

純子

緑陰に平家ゆかりの白き花

芳子

出席者 真鍋 馬場 吉崎 氏家 川原 小山
投句者 森 大黒 小林



梅雨の晴れ間、城山は緑滴るばかりである。帯曲輪への径には、茂みに夏アザミが丈高く花をつけ、姫女苑は斜面を覆って雪崩れるように咲いている。十葉の花の白さが瑞々しい。雨は城山をこんなにも生々たさせる。合歓はもう咲いたかな？と廻り道をしてみたが早過ぎたようだ。部屋に戻ると温かいコーヒーが待っていた。清記をしつつお喋り、楽しいひと時である。免許を返納したので電車で来た友も。こんな時間を持てることを幸せに思う、続けたいものである。